

Triumph onedollar ～勝
利への放浪者～

リューヤ

シーバルーでの旅が始まり、初めての夜が来た。夜になると、この周辺が岩と砂に囲まれた台地の空気は一気に冷え込む。地面に野宿するのもおっくうで、草一本生えていない地面では寝心地も最悪の一言だ。たき火を囲むように座った一同は今とても静かな夕餉の真っ最中だった。違う、全員ではなかった。じゃんけんで勝ったドクターが車の後部座席のシートの上でふんぞり返っているし、先に食べ終えたアゲートはすでに眠っている。つまり今食っているのはジン、ジェット、虎眼の三人だけになる。

そしてジンが食後の一服を楽しもうと新しいタバコに火を付けた、ちょうどその時だ。

「・・・あ、忘れてた！」

いきなり虎眼が何か思い出したかのように声を上げた。珍しく大声を上げたものだからジェットはカップの中のお茶をこぼし、ジンは間違った煙の吸い方をしてみせてしまった。

「ゴホゴホッ！・・・どうしたんだ急に？」

「すまない、昼間話さなければならぬことを思い出した」

「話さなきゃならぬこと？」

柄にもなく虎眼があんな思い出し方をするのだ、きっとかなり重要なことなのかもしれない。アゲートとドクターはすでに寝てしまっているのだから仕方なくジェットとジンだけが虎眼の話に耳を貸した。

「このシーバルーには、ラプチナには無い特性を身に付けた生命体と食物連鎖が存在しているんだが・・・」

「ほう・・・」

「その頂点に立っている生物が、このあたり一帯にウジャウジャしているはずなんだ」

「食物連鎖の頂点ねえ・・・で、それって何なんだ？」

「たぶん運が良ければ・・・いた」

話を一度切り、目を細くして辺りをうかがうと、そいつを見つけられた。そいつが逃げた直前にすっと立ち上がるとそいつを追いかけて簡単に捕まえた。

戻ってきた虎眼の手の中にいたのは・・・もとい、指に摘まれていた生物は、意外なことに一見するとただのトカゲだった。トカゲは焚火の日に照らされ、体をくねらせて逃げようと必死になっている。

「こいつはそれだ」

「……ただのトカゲじゃねえのか？」

「食えんの？」

「残念だがこいつは生では食えない。そしてただのトカゲでも無い」

生き物を食えるか食えないかで判断するジェットに少し呆れながら、虎眼は澄ました顔でかなり衝撃的な事実を述べた。

「こいつはな、れっきとしたドラゴンだ」

「は？このちっこいのが……」

「ドラゴン？あの神話なんかに出てくる？」

「そうだ」

虎眼のことは信じ切れないジェットが、虎眼の手からドラゴンと名称されたトカゲをとり上げた。体長は約10cm弱、土色の鱗と長いしっぽが特徴的だがどう見たってこんなのはただのトカゲでしかない。

「ふざけてる訳じゃないんだろうな、虎眼？」

「当たり前だ。コイツの正式名称はミメラドラゴン、炎に強い耐性を持っているタイプで、成長すれば全長5メートルの立派なドラゴンになる。ちなみにコイツの鱗は熱伝導率が良くてな、加工されて鍋やフライパンなんかになって重宝されている」

どうも虎眼の話はウソっぽくなかった。でもまだ信用し難い顔をしてそのミメラドラゴンなるトカゲを睨みつけるジェットを見て、虎眼が論より証拠と言ってそいつを取り返した。

そして何をするのかと思えば、ミメラドラゴンを焚火の中に放り捨てたのだ。ドラゴンは成す総べなく焚火の中へ火の子を巻き上げてまっさかさま。本来ならこれでこんがりトカゲの黒焼きとなって漢方薬の仲間入りを果たすのだろうが、コイツはそうならなかった。

数秒後、炎の中からミメラドラゴンが地面を這いずって脱出してきた。まるで何事も無かったかのように糸のような舌を数回チロチロ出し入れすると、そのままどこかへ走り去ってしまった。これで立証完了だ。

「マジでかよ？」

「ドラゴンは基本的に昼に行動するが、夜行性のドラゴンも決して少なくない。つまりこれからは野党からドラゴンに警戒して夜を過ごさなければならないと話しておこうと思っていたんだ。という訳で俺は寝る」

言いたいことだけ言い終えると、虎眼はその場でさっさと眠ってしまった。

取り残された二人は今まで経験したことのない緊張感に襲われ、その晩は一睡もできることなく

朝を迎えてしまったのだった。

翌朝9時。今日の運転は虎眼に引き続いて猫眼だった。助手席にはドクターが地図を広げて座り、残りの3人が後部座席で窮屈に身を寄せて座っている。この時ドクターは後ろの3人の中でも特にジンとジェットを気にかけている様子があった。二人の眼の下にはクマが出来ており、顔色も優れていない。明らかな不眠症の典型的な症状だ。

「どうかしたのかい？気分が悪いならいったん車から降りて診察してやろうか？」

「いや・・・結構だ」

そういうジンの声もかすれがかっており、いつも以上に元気の無い喋り方だった。まさか昨日一晩見たことの無い怪物に襲われるのが怖くて眠れなかったなんて、例え口が裂けても言う事などできないに決まっている。

平静を装ってタバコを啜るが、啜るタバコの位置が逆であるとドクターに指摘され、もうどうでもよくなってタバコを仕舞った。

そんなしょうもないやり取りを繰り返しているうちに、やっと新しい町が見えてきた。

地図で位置を確認してみると、町の名前は「コンバット」。パンフレットにも載っている街で、この街を境目にこの先は岩の大地から砂漠へと変わっているらしい。

「ドクター、あの町に寄って休ム？」

「そうしよう・・・患者もいることだしね、キシシシ」

「・・・頼む」

そんなわけで猫眼はアクセルを踏み込む足に力をさらに加え、加速してコンバットの町へ急いだ。

コンバットの町は、ラプチナにある村をそのまま乾かした様な雰囲気のある町だった。車を降りて少し歩いていると、ここの住民はほとんどが全身を布でくるんだような服を着ていることにアゲートが気付いた。この格好は強い日差しから身を守るためであるとドクターが説明してくれた。このあたりに住んでいる人間はほとんどがこのスタイルなのだと話し終わると、一体どこから取り出したのか知らんが一人だけ日傘をさして日光対策に勤しんでいる。何処から出したのかジェットが突っ込んでみたが、笑って話をはぐらかされて教えてくれなかった。いつもの事だから別にいいが、やはり気になる。

「ふいい、しかし今日もまた暑いさ〜。もう頭がどうにかなっちまいそうさ」

「もうどうにもならない頭しか持ってない癖に、今さら何がダメになるんだよ」

「ジン、それどういう意味さ？」

暑さでイライラ気味とはいえ、今のジンのセリフにはアゲートもカチンときた。ジンの肩を掴んでケンカ腰になろうとした、その直前・・・

ドカアアアァン！！

今通り過ぎたばかりの建物から大きな音が鳴り響き、一行の足を止めてしまった。振り帰ってみると、ボロボロに壊れた木製ドアの破片と一緒に一人の男性が地面に転がっていた。しかも口を切ったようで唇からは血が流れ、腹を苦しそうに抑えてもだえている。

続くようにその建物の中から今度は3人の男連中が出てきた。しかもこの3人、一行には凄く見慣れている服装をしている。

土色の固そうな服にヘルメット。コイツらは以前「マテバ」ではち合わせた例の軍人共と同じ奴らだ。3人の内の一人が男の前まで歩いてくると、何を考えているのか男の身体を踏みつけてしまった。

「お、お願いします！代金は結構ですので、せめて例の件をお願いします！」

「やかましいジジイだな・・・料金がタダなのは当たり前だが、我々がそこまで手を回す必要がどこにある？こっちだって暇ではないのだぞ」

「なら、こちらの代金を払ってください！」

「うっとうしいんだよクソジジイ！！」

とうとう癩癢を起した一人の軍人がこのオヤジを蹴り飛ばした。オヤジは顔から地面に着地してしまうと、今度は地面に押し付けられるように頭を踏みにじられてしまった。

「我々軍隊がこの村を統括し、せめて戦争の火種がこちらまで飛んでこないように尽力しているのだ。守られている立場の弱者風情が、これ以上我々にどんな手間をかけさせる気だ！？」

そうオヤジに言い放つと、踏みつける力をより強めて頭を地面にめり込ませた。まさに弱者を踏みにじる、という表現がここまで合致する光景も珍しいものだ。

周りを見渡すがこのオヤジを助けるような素振りをする住民は誰もいなかった。このままではあのオヤジが危険だと踏み、仕方なくここはまたこっちが加勢するしか無さそうだった。

コンバットの町は、ラプチナにある村をそのまま乾かした様な雰囲気のある町だった。車を降りて少し歩いていると、ここの住民はほとんどが全身を布でくるんだような服を着ていることにアゲートが気付いた。この格好は強い日差しから身を守るためであるとドクターが説明してくれた。このあたりに住んでいる人間はほとんどがこのスタイルなのだと話し終わると、一体どこから取り出したのか知らんが一人だけ日傘をさして日光対策に勤しんでいる。何処から出したのかジェットが突っ込んでみたが、笑って話をはぐらかされて教えてくれなかった。いつもの事だから別にいいが、やはり気になる。

「ふいい、しかし今日もまた暑いさ～。もう頭がどうにかなっちまいそうさ」

「もうどうにもならない頭しか持ってない癖に、今さら何がダメになるんだよ」

「ジン、それどういう意味さ？」

暑さでイライラ気味とはいえ、今のジンのセリフにはアゲートもカチンときた。ジンの肩を掴んでケンカ腰になろうとした、その直前・・・

ドカアアアァン！！

今通り過ぎたばかりの建物から大きな音が鳴り響き、一行の足を止めてしまった。振り帰ってみると、ボロボロに壊れた木製ドアの破片と一緒に一人の男性が地面に転がっていた。しかも口を切ったようで唇からは血が流れ、腹を苦しそうに抑えてもだえている。

続くようにその建物の中から今度は3人の男連中が出てきた。しかもこの3人、一行には凄く見慣れている服装をしている。

土色の固そうな服にヘルメット。コイツらは以前「マテバ」ではち合わせた例の軍人共と同じ奴らだ。3人の内の一人が男の前まで歩いてくると、何を考えているのか男の身体を踏みつけてしまった。

「お、お願いします！代金は結構ですので、せめて例の件をお願いします！」

「やかましいジジイだな・・・料金がタダなのは当たり前だが、我々がそこまで手を回す必要がどこにある？こっちだって暇ではないのだぞ」

「なら、こちらの代金を払ってください！」

「うっとうしいんだよクソジジイ！！」

とうとう癪癪を起した一人の軍人がこのオヤジを蹴り飛ばした。オヤジは顔から地面に着地してしまうと、今度は地面に押し付けられるように頭を踏みにじられてしまった。

「我々軍隊がこの村を統括し、せめて戦争の火種がこちらまで飛んでこないように尽力しているのだ。守られている立場の弱者風情が、これ以上我々にどんな手間をかけさせる気だ！？」

そうオヤジに言い放つと、踏みつける力をより強めて頭を地面にめり込ませた。まさに弱者を踏みにじる、という表現がここまで合致する光景も珍しいものだ。

周りを見渡すがこのオヤジを助けるような素振りをする住民は誰もいなかった。このままではあのオヤジが危険だと踏み、仕方なくここはまたこっちが加勢するしか無さそうだった。

ジンはベルトから剣を抜くと、鞆におさめた状態でオヤジを踏みついている軍人の足に剣をあてがってやった。

そんなジンの行動に対し、明らかに邪魔ものを見る様な眼で軍人は睨みを効かせて振り向いた。

「なんだ貴様は？」

「別に・・・どけてやりなその足。何があったのかはよく知らねえけど顔踏まれて痛くねえ野郎なんざそういねえだろ？」

無表情のままそう言い放ってやると、あいさつ代わりにジンは口いっぱい吸い込んだタバコの煙をその軍人の顔めがけて思いっきり吹き出した。煙になれていなかったのか軍人は簡単に煙に巻かれ涙を流しながらゲホゲホと咽てしまった。その一瞬のスキを突き、鞆を両足の間へ差し込むとテコの原理で足を払い、軍人は簡単に硬い地面に尻もちを打ってしまった。その無様な姿をジンは上から見下し、トドメに鼻で笑ってやった。

「ッ貴様あ！！」

軽くキレてしまった軍人は腰のホルダーから銃を抜き取ると、何のためらいも無しに銃口をジンへ向け、何の慈悲も感じる事の無いまま引き金を引いた。

しかし発射された弾丸はジンに命中することは無かった。銃が発砲された直後、ジェット腕からプロメテウスの手首のみが出現し二人の間に割り込み、直進しかできない弾丸を空中で見事指でキャッチして見せたのだ。指の中で高速回転する弾丸はしだいに熱を受けて溶けだし、最後は気体となって蒸発してしまった。

これに取り乱した残りの二人も慌てて銃を握るが、その手はドクターが撃ち放ったメスのほうが早く手首に突き刺さり、銃が足元に転がってしまう。その直後、アゲートの斧とジンの剣が3人の頭をブチ殴り、大人しくさせることに成功したのだった。アゲートにいたってはヘルメットを簡単に破壊し、バラバラになった破片の中から大きなコブが顔を覗かせている。もちろん殴ったのは刃ではないので3人とも死んでなどいない。ちょっと脳震盪を起こして気絶してもらっただけだ。

最後の仕上げに、猫眼が3人を地面の上につつ伏せで寝かせると、さっきのオヤジのように順番に踏みつけてその頭を地面の中に陥没させ、仕事はお終いだった。

「ジン、一丁上がりネ！」

「ご苦労さん。おいおっさん、大丈夫か？」

新しいタバコに火を付けて確認すると、すでにドクターの治療は終わっていた。口元の傷と鼻血、後は少し頭が擦り切れている程度の軽い傷だったようで大事には至らないとドクターは診断する。

「ああ、ありがとうございます、おかげさまで助かりました」

「キシシ・・・明日には治る傷だよ、大したことは無い」

「はい・・・あの何かお礼がしたいのですがもしよろしければうちの店に寄っていただけませんか？」

「店？おっさん何の店やってるのさ？」

「ええ、飲食店です」

飲食店・・・すなわちメシ屋。そう言えばまだ朝飯を食べていない。すきっ腹の状態で軽く暴れて空腹もちょうどピークに達しているところだし、お礼というのならば断わるのも忍びない。オマケにここの所しみったれた飯ばかりだったので、久しぶりにまともな食事にありつくいいチャンスでもある。

という訳で一行はこのオヤジの誘いを快く承諾したのだった。

あれから1時間後、「お礼」を称されたタダメシを5人は激しく喰らいあつという間に数日ぶりの満腹感で満たされ椅子にもたれていた。特にガッツきまくったアゲートは腹が膨れ、ベルトも外している始末だ。ジンも食後の一服を楽しみ、猫眼に至ってはデザートも賞味している。

「食った～・・・久々に食ったさ～」

「キシシキシ・・・やはりタダメシよりうまいメシはおいそれとないものだね」

珍しくドクターも腹が膨れており、お茶をすすりながら嬉しそうに微笑んでいる（ように見えたのは気のせいだろうか？）。

「・・・フゥ。悪いなおっさん、こんなに食わせてもらって」

「いえいえ、恩人のためなら幾らでも食べていただいて結構ですよ」

そう言いながらこの店の主人、すなわちさっきのオヤジがテーブルの皿をニコニコと片付けた。オヤジはそう言っているが、明らかに顔は「こんなに食うのかよ・・・」と呆気にとられた表情が見え隠れしている。

それからさらにしばらくの間一行は腹休めに少し談笑をしていると、あの例のオヤジがため息をつきながら無人の椅子に腰かけ、面白くもない話題を振ってきた。この展開、一行は知っている。

「・・・旅の方々、こんなことを言うのも何なのですが、あなた方の実力を見込んで頼みがあります」

・・・ほらきた。
一行の口から会話が止まり、一瞬で表情が崩れ落ちた。

「うまいメシには裏がある・・・ってか？」

ジンは煙を吐いて吸いがらをつぶすと、そうつぶやいた。

片づけられたテーブルの上には、5人分の水が入ったコップとオヤジの湯飲みだけ。いつの間にか空気が重く沈んでしまい、皆さっきから黙りこくっている。その原因はこの中で最も暗い顔をしているこのオヤジであることはまず間違いない。

そんな空気の中、果敢にも最初の一声を出したのが猫眼だった。

「あのう・・・頼みって、何カ？」

「はい・・・まずはこの村で起こっていることからご説明します」

オヤジはかなりしょぼくれた顔で湯のみの中の茶をすすり、ゆっくりとした口調で話した。ここからの話はナレーション形式で説明しよう。

このコンバットの町はこの数年前からある動物の被害を受け続けている。それは一匹ではなく、多い時には数十匹という群れで襲ってくるのだ。

町は月に2、3回のペースで定期的に襲撃されその度に町の食料を喰い尽して消えてしまうようなのだ。さらにここ最近では食料だけではなく町の住民も襲われ、今までに13人の犠牲が発生している。

そのせいでこの街では経済的な面で危機的な状況まで追い込まれてしまい、食べ物も満足に仕入れられることも出来ない有り様になっている。

この辺りを統括している軍に何度も掛け合ってそいつらを退治してもらおうと試行錯誤したが、身分の低い人間の言葉には耳も貸してくれないのが現状だった。今日も偶然この店に食事に来た軍人に頭を下げてみたが、結果がさっきの通りだった訳だ。

そんな中、通りかかってくれたのがこの一行。そしてこの今の現状である。

そんな状況の中で5人は腹が膨れるまで飯を食い尽したのだ。しかもタダで（ここ重要）。

流石のドクターでさえ罪悪感を感じているようでさっきから笑い声一つ上げていない。他の4人も顔を青ざめ、今まで食った自分のメシの量を再び思い出した。アゲートは特に喰っているので罪の意識が一番重かったようで、さっきから頭を抱えて俯いている。まあ仕方が無いことだろう。

つらは今度いつ襲ってくる？」

「おうそうでしたな。彼奴らの名前は『ハイドラゴン』！次の襲撃は・・・周期的に考えましてきっと今夜でしょうな！」

「いやメツチャ急な話じゃねえかオイ！！」×5

店を出て行った後一行は今日の宿を探した。見つけた宿の中でもさっきの話は筒抜けになっていたようで、無料で泊めてくれると宿の主人は言ってくれたが今度はこの誘いを丁重にお断りし、正規の宿泊料を払い部屋を借りることにした。

それから5人は一度一つの部屋に集まり、今日の作戦会議を開くこととなった。

「なにはともあれ、だ・・・何の情報もないまま戦うのはさすがにヤバイ」

そう主張するのはジンだ。今回相手にする喧嘩相手はドラゴン、生れて初めて対面する相手をどう対峙したらいいものか全く見当もつかないのは猫眼を除いた残りの4人全員だった。という訳で、今回の作戦指揮官は自動的に経験者の猫眼に委任されることになったのだ。

「つう訳でだ猫眼、お前そのなんとかドラゴンについて知ってることがあったらまず話せ」

「ハイエドラゴン、ネ・・・まあ私も昔狩って焼いて食った記憶ぐらいい残ってるヨ？」

狩って食った・・・ちょっと不穏なセリフに一同効かなかったことにしておいて、猫眼の説明に耳を傾ける。

「ハイエドラゴンは通常群れを成して生活するドラゴンヨ。一つの群れに対して数は約15～20頭、全長は大体140cmの小柄な奴だけど油断は禁物ネ。連中は物凄く気が荒くて一斉に獲物に食らいついて喰い殺そうとするとんでもない輩ネ」

「なるほど・・・群れを成すのは単体では力が弱い証拠だ。倒すなら慎重に各個撃破、これが安全牌だろうね、キシキシ」

ドクターはいつの間にか取り出していた図鑑に目を通しながら、猫眼の説明に一言加えて微笑んだ。

「なるへそ・・・つまり集団リンチは考えず、目の前の相手とタイマン張ればいいさね？」

「その通り、逆に言えば囲まれればその瞬間一巻の終わりと思いたまえ」

「手間がかかりそうで面倒くせえな・・・なあもっと手っ取り早い方法とかねえの？」

ジェットの意見にも一理あるとジンは思う。ハイエドラゴンにも何か弱点的なものがあればそこを一気に責めたてて一網打尽にした方が明らかに手っ取り早いし何よりその方がこっちも楽だ。ジェットの質問に対し猫眼は、何やら急に表情が曇って顔が俯いて来た。

「手っ取り早い方法・・・・」

「・・・あるんだな、是非俺も聞いておきたいんだが？」

「一応、無くは無いな・・・けどこの方法だけは絶対に勧められないヨ！」

猫眼にしては妙に神妙な面持ちで、まるで叫ぶように声を荒らげてきた。その方法が気になっていろいろ話に突っ込んでみたが、猫眼はかたくなに口を閉ざしその方法を絶対に教えてはくれなかった。

「ダメヨ・・・これ確かに成功すれば相手確実にビビって近寄らなくなる。けど失敗したらとんでもない地獄見ル」

いつもの笑顔は一切なし。かなり真面目に話している猫眼に皆動揺し、口から言葉が出なくなってきた。話が冷たい方向に飲み込まれ、部屋の中は空気が重くなるのと並行して静寂で包まれてしまう。

「・・・いいかい猫君、今回の依頼はいつものように野党やゴロツキを相手にしているのとは違う。皆一度も戦ったことの無いドラゴンが相手なんだ。今のままこの状態で戦えば下手をすれば小生か誰かが奴らに食われてしまう可能性がある、その可能性を少しでも軽減できるのは君の経験と指南なんだ。君がこの中で誰かがいなくなるのを望んでいないのなら、教えてほしい」

ついに見かねたドクターが重い腰を上げ、猫眼の肩に両手を置き正面から説得しに入った。自分の見の保身しか考えていないように思っていたが、ここまで説教的に全員の事を気遣った内容の話聞くのは全員初めてで、アゲートは感動して涙を流し、ジェットは恥ずかしそうに鼻の頭をこすっている。ジンも不覚ながらドクターの事を見直し、ほんのちょっとだけ嬉しく思えてきた。

しかし、しばらく黙り続けてきた猫眼の口から出てきた次の答えは・・・NOだった。

「ごめんドクター・・・とっても嬉しいけど、やっぱり教える訳にはいかないヨ私」

これだけは成しても絶対に土にしたくない方法・・・きっとそれはよっぽど危険なことなのだろうと一同は理解し、この話はここで終了することにした。ドクターも仕方なく肩から手をは離し、元の位置に座って本を広げる。

「・・・しかしさあ、何でそんなに教えたくないのさ姉御？」

「だって・・・」

空気を読み切れてい無かったアゲートが最後にフツ化かてきた質問に、猫眼は瞑想するように少しの間目を閉じて黙った。

そしてその次のセリフが・・・

「だってそんなことしてドクターに嫌われたくないネ～私～！」

・・・思わず全員がコケた。

猫眼は突然普段と同じの調子を取り戻すと、いつものようにドクターに甘えるように抱きついた。ドクターもまんざらではないようで、いつもの様にニヤニヤと笑っている。

深夜10時32分。町人たちの話によると連中は大体この時間になると襲ってくると言っていた。ジン達5人は町から数百m離れた場所でハイエドラゴンを迎え撃つべく待機している。町の外に出るとその先は果てしない砂漠が広がっており、今まで踏みしめてきた固い土や岩の地面とは全く違う環境下だった。

サラサラと乾ききった砂は相乗以上に足が取られやすく、歩きにくい上に踏み込みもままならない状況になっている。こんな今まで体験したことの無い土地条件でどうやってドラゴンを退治するのか相談したところ、ジンから帰ってきた答えは「ハンデだと思え」だった。

「ドラゴンって思い込むから悪いんだ、奴らをただのデカイトカゲ野郎だと思えばなんてことないだろう？」

「キシシシシ・・・あまり舐めてかからないことに越したことは無いんだけどねえ」

「ドクターに一理あるネ！」

「ハイハイ気いつけりゃいいんだろ？ジェットォ！なんか見えたか？」

ジンはドクターの忠告に生返事を返すと、真上へ向かって大声を上げた。上空には杖に跨ったジェットがスタンバイしており、町から借りた暗闇でも景色が鮮明に見える機械『暗視スコープ』を覗きながら前方を見張っている。

いい加減こんな砂の大地ばかり眺め続けて退屈になってきた時、ジェットの両目がとうとう獲物の姿を捉えた。砂塵を巻き上げながらこちらへ突っ走ってくるあの姿は、間違いなくハイエドラゴンの群れだった。

「来たぞお！！正面じゃねえ、2時の方角！数はよく解らねえけど大体30匹くらいいるように見えるぞ！」

「チィ！急げ！！」

ジェットの指示に従い地上の4人は急いで群れの方角へ走った。細かくジェットの指示を聞き、猫眼の眼力にも頼って走り辛いこの砂地を駆け回りなんとかギリギリで群れの進行方向真正面まで来ることができた。群れはすでにジンの眼からも確認できるくらいまで接近しつつあり、時折自身のような足音と共にドラゴンの咆哮が聞こえてくる。

「しかし30匹か～、一人頭目標は6匹ってことでいいさジン？」

「そういう事だな」

ジンも呼吸を整えると剣の留め金を外すと、白い刃が二色の月の光を反射してギラリと光りを放った。その後ろでも猫眼がパキパキと指の骨を鳴らし、アゲートはバンダナをキツく締め直して気合いを入れ直している。今回の相手は人間らしい感情を一切持ち合わせていないドラゴンなのだ。スキを見せた瞬間確実に殺されてしまうような本物の命を賭けた大喧嘩になりそうで全員いささか緊張しているのも無理は無い。いつも以上に命がかかっていることを肝に銘じる必要が

ある。

「ようし・・・行くぞコラァ！！」

ドラゴンの咆哮にも負けないジンの気合いの掛け声と共に全員が走りだし、ついに喧嘩が始まった。

靴の中まで砂が入ってこようがお構いなしに走り続けると、すぐにハイエドラゴンの群れと合流できてしまった。

ハイエドラゴンは、本当にと影をそのまま足を付けて立ち上がらせたような姿をしていた。薄い茶色の鱗で包まれた体を前のめりに沈め、長いしっぽでバランスを保ちながら、穏当に同じ砂の上を走っているとは思えないスピードで迫ってきた。

この喧嘩の一番槍を握ったのは上空にいたジェットだった。飛行用の杖とは他に携帯用のステッキを取り出すと、先端をハイエドラゴンの群れへ向けて狙いを定めると拳大の火球を打ち放った。火球は空中で花火の様に分散すると指先程度のサイズになり、それぞれが弾丸に匹敵するスピードでハイエドラゴンの群れを襲った。

「ブラッティ・メアリー」の応用魔術、「バージン・メアリー」という魔術だ。

火弾は群れの最前列を中心に命中し、攻撃を受けたドラゴンは空がに穴が空き断末魔の様な悲鳴を上げて何匹か倒れてしまった。あまり自信が無かったこの魔術だが、正確に狙えば効果があることが証明され俄然やる気がわいてきた。

5人は一か所には固まらずそれぞれバラバラになって喧嘩を始めた。絶対に囲まれないように細心の注意を払いながら目の前のドラゴンを確実に殲滅する、これが今回の作戦の最終決定であり、このフォーメーションも作戦内容の一つだった。

それに気をつけながら、ジンは早速目の前の一匹に斬りかかった。右の剣横から一直線に薙ぎ払ってみる、すると刃と鱗がぶつかった瞬間ガチンッ！と硬い物質を切った時のような感覚が走りドラゴンが横へ吹っ飛んでしまった。今の手応えから察すると肉はあまり斬れていない、想像以上に硬い鱗に舌打ちをし戦い方を考え直した。

「生き物を斬る」より「石を斬る」感覚で剣を振った方がマシかと思っていると、そこへ別のドラゴンが背後から襲ってきた。大口を開けて中から鋭い牙の行列が光っている。頭を食われる前に無理やり身をよじて回避すると、体をひねった勢いで剣をその開いた口の中に捻じ込んでやった。思った通り身体の内側は脆いようで口の中を一瞬で血まみれにしたドラゴンは頭まで剣を貫通させ即死した。これをヒントにジンは「斬る」より「突く」ことを重点して戦いに臨んだ。

対してアゲートはジンの様に弱い「点」へ向かったの攻撃なんて細かいことが出来ないので、斧をひたすら振りかざして力任せに目標を切断するしかなかった。

だが足元が砂なのでうまく足が踏ん張れず攻撃がミスしてしまう事が多い。しかしそこはドクターがフォローに回ってくれたおかげで命を落とさずにいられた。

ドクターはさっきから直接ドラゴンの相手をすることは無く、ジャックザリッパーに任せっ切りだ。自分は逃げることに専念し、背後のジャックがいつものようにカタカタと骨のアゴを鳴らしながらメスを振り回しドラゴンを斬り裂いている。

さらにそれだけではなく、時々牽制性攻撃としてジャックが特別な技を披露している。囲まれそうになるとジャックが自分の纏っている黒いマントを掴み、まくりあげた。するとマントの奥に広がる夜よりも深い暗闇の奥から無数のメスが雨の様に跳び出し、ハイエドラゴンに命中させてドラゴンを混乱させている。威力は低いが、隙が出来たところをすかさずアゲートが首を斬り落として一仕事完了、という流れだ。この技の名をドクターは「トリック・オア・トリート」と呼んでいる。

これに便乗しているのは何もアゲートだけではない、むしろアゲートよりこっちのためにドクターは攻撃しているのだ。

ハイエドラゴンにメスが突き刺さり混乱した瞬間、一瞬で間を詰めた猫眼が長い首へハイキックを食らわせる。靴に重しを仕込んだ靴を日常的に穿きこなす猫眼の鉄脚から繰り出された一撃は、いとも容易くドラゴンの鱗を砕き、肉を裂き、骨を砕く。

場数を踏んでいる経験者の実力は伊達ではなく、すでに猫眼はドクターのフォローのおかげで目標の一人6匹を達成していた。

そんなこんなで苦戦しつつも、30匹を相手に戦った5人は無事にハイエドラゴンの群れを討伐することに成功してしまった。残るは目の前にいるたった一匹だけだ。これをブッ飛ばせば以来完了となる。

「さてと、最後の一匹は誰がやる？（誰が殺る）？」

「あ、オレっちやりたい！（殺りたい!）」

血まみれになった刀身を布でふき取りながら質問するジンに、アゲートが元気いっぱいに戻事をした。あれだけの数を相手にしたと言うのに、アゲートはまだまだ元気いっぱいなのが羨ましく思うジンだった。慣れない戦い方でさっきから足腰が痛いと体が訴えている。

許可をもらったアゲートが斧を肩に担ぎ直し、ノッシノッシとドラゴンに近づいてきた。

するとさっきまで震えていたハイエドラゴンが、踵を返して明日の咆哮へ逃げ出してしまった。

もちろんアゲートも逃がすまいとハイエドラゴンの背中を追いかける。足の速さは奴の方が早い、この距離なら斧を投擲すれば十分ブツ切れる間合いなのでアゲートも斧を握る腕に気合いを注ぎ込んだ。

その直後だ

「ギュオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオン！！」

逃げながらハイエドラゴンが突然、空へ向かって今まで聞かない高い鳴き声を響かせた。今まで聞いて来た威嚇や怒りの鳴き声でも、断末魔の鳴き声とも違う謎の鳴き声。これが何を意味しているのかアゲートは知りもしないので、そのままハイエドラゴンを追いかけて続けた。

「・・・なんだ今の？猫眼」

「さあ、私も聞いたこと無い鳴き声ネ」

猫眼も知らないような情報ではどうしようもない。きっと命乞いか何かだろうと勝手に決定付け
ジンはタバコを加えた。

しかしたった一人だけ様子がおかしい奴がいる。そいつはドクターだ。ジェットはそれに気が付
き良く見てみると、ドクターは何やら急に呼吸が荒くなり、オマケに初めて見たが汗を流して
いた。さすがにこれはおかしいと思い、一声かけてみた。医者の不養生よろしく具合でも悪いの
かもしれない。

「どうしたんだドクター、さっきから急に？」

「ヤバ過ぎる・・・」

「・・・？」

「バンダナ君！！そいつを放っておいて早くこっちへ戻るんだ、急ぎたまえ！！」

ドクターらしくもない慌てぶりを見せ、近くにいた3人は驚愕し走っていたアゲートもビックリ
して思わず言う通りに足が止まってしまった。

「へえ、なんでさードクター？」

「山育ちのくせに今の鳴き方が聞こえなかったのかい！？今のは野生の動物が周囲にいる仲間を
呼ぶ時に発する救難信号の鳴き声だ！！」

それを聞いた瞬間全員の顔から血の気が引いた。

今になって思い出してみると確かにそうだ、昔アゲートは父親と一緒に野生の鹿を狩りに山へ行
ったことがある。あと一息のところまで逃がしてしまったが、その時も確かにさっきの様な甲高い
鳴き声を山の中で木霊させていた。直後山の中にいた大勢の鹿の大群が仕返しと言わんばかり
に迫ってきて大惨事になったのを覚えている。

ドラゴンも野生の動物と同じ習性を持っているとしたら、今の鳴き声はドクターの言う通り危険
な赤信号を意味している。

急いで戻ってきたアゲートと合流しこの場から逃げだそうとした時、全てが遅かった。

振り返ったとたん正面の砂丘が不自然に盛り上がり、砂の中から別のハイエドラゴンが現れ始
めた。もちろん一匹や二匹でとどまる様な数ではない。体中を砂にまみれさせて現れたハイエド
ラゴンの数はざっと20匹。別の逃げ道を求めて進路を横に変更すると、その景色の向こうから
は別のハイエドラゴンの群れが走ってやってきたところだった。その数は15匹。反対方向を見
ればそこにはすでに合流済みのハイエドラゴンが横一列に並び、威嚇するように口を何度も開閉
させ鋭い牙をガチガチと鳴らしている。この数が25匹。

総勢60匹のハイエドラゴンの群れに、一行は完全に包囲されてしまったのだった。全員目の前

の惨状に怒りを露わにし、目を血走らせてこちらを睨んでいる。

「・・・猫眼、こんな情報聞いていないぞ？」

「私も・・・こんなの初めてネ・・・フニユ～」

今まで見たことの無い数のドラゴンに囲まれたせいなのか、猫眼が真っ先に頭のブレーカーが切れてしまいその場でぶっ倒れてしまった。出来ることなら全員そうしたい、しかしそんな事が出来ないくらい他の連中の神経は忌々しいくらいに凶太かったのが悔やまれる。

ジンでさえ一瞬剣を落としそうになったが、すぐに気持ちを入れ替えたつもりになって現状を確認し直した。相手の数は60、真正面からのみだったらなんとかなったかもしれないだろ

うが・・・いや、絶対に無理なのは明々白々だ。オマケにこの取り囲まれた状況、一行に勝算は全て無くなっている。なにしろさっきの30匹を相手にしただけですでにヘトヘト状態だし、武器も傷んでいる、ジェットとドクターも魔力の残量が怪しい。一応倒れた猫眼を囲むように全員で背中合わせになってみるが、こんな行為に何の意味もない。

「なあジェット、前に見せたプロメテウスだっけ？あれで一気に燃やす事って出来ねえさ？」

「残念・・・一匹焼くだけでも少し時間がかかるし、さっきの魔術も正確に急所を狙わねえと死んでくれねえ」

「マジで？ドクターは？」

「小生のジャックは元々人を斬ることに特化しているが獣の固い鱗を斬ることは全くできない」

「ちなみに、オレも限界が来てるし剣もボロって来てる。」

ジンの剣を横目で見てみると、石のように硬質な鱗を散々切り続けた剣の刃は傷だらけで、所々小さく欠けているのが見えた。

そんな人間どもの状況とはお構いなしにハイエドラゴン達はジリジリと距離を狭め始めた。このままでは確実に食われてしまう、いっそのことジェットの杖に全員で跨って飛んで逃げるなんてぶっ飛んだ方法を立案したが不可能と断言されアゲートはさらに落ち込んでしまった。

「キシキシ・・・通常カラスは体よりも先に顔を啄ばむらしい。目玉や舌、耳などは特に柔らかく食べやすいとか」

「笑えねえよ」

「流石にヤバいなこりゃ・・・どうすべ？」

「死ぬのなんて嫌さ～～！！」

「・・・・・・・・死ぬ気なんか毛頭ない」

ついにアゲートが泣きだして弱音を吐いた時、今度は普段から聞き慣れている低い声が足元から聞こえてきた。声がしたのは自分の後ろ、気絶した猫眼・・・・・・・・違う。立ち上がったのは猫眼の身体から入れ替わった虎眼だ。

虎眼はそれ以上何も言わず立ち上がると、編み込んである髪をおろしてシンプルな一本に縛りあげ、ストレッチのように首をコキコキと鳴らした。

すると今度は4人を押しつけてハイエドラゴンに自ら近づく為に歩き出したのだ。いくら虎眼といえどこの数を相手にするのはさすがに無理がある様に見える、あの行動はまさに自分で自分の寿命を縮めているのにも等しい。しかし4人はそれを止めなかった。というより、止めることができなかった。虎眼の背後から漂う、あの異常なオーラに押し殺されてしまい誰も口を開くことができなかったのだ。

虎眼はまっすぐにこの大群を呼び寄せたあのドラゴンへ向かって歩いている。間合いにして約4m、すでにドラゴンは目と鼻の先。ここまで血数いてきた人間はドラゴンにとっては格好の獲物でしかなく、喰わずにいられる奴などいない。そう思わせるかのようにハイエドラゴンは頭からガブリつくように大きく口を開け咆哮した。

が・・・

ギョロツ！！

まさにそんな擬音が虎眼の目玉から聞こえてきた様な気がした。虎眼はただ睨みつけたのだ。目の前にいる、今まさに自分を食おうとしているこのハイエドラゴンを、全力で睨んでいる。その目を見てしまったハイエドラゴンはその凄まじい光かたに臆してしまい、まるで金縛りに陥った様に身体の全機能が硬直、ストップしてしまった。

さらに続けて隣のドラゴンを睨み、さらに隣の、隣のと次々にドラゴンを睨み続けた。すると睨みつけられたすべてのドラゴンは虎眼の眼力にビビり全員進行がストップしてしまっただけではない。

。

「どうしたんだチビトカゲ・・・そんなに大口開けて、俺とにらめっこでもして遊びたいのか？」

虎眼の瞳の色がいつも以上に濃い色に変わった。とたんどラゴンの身体はガタガタと震えだし、皮膚から汗の様な物が流れ落ち始めた。

「まさかと思うが・・・俺を食うつもりだったなんて言わないよなあ？」

虎眼はあくまでもドラゴンの眼を見つめながら、なんとなく落ち着いた様な雰囲気ですりかかっている。すると今度は動けないこのドラゴンの頭に左手を置き、細長い首を右手がそっと表面を撫でた。

直後・・・

「この俺を食おうなんて・・・おこがましいにも程があるわこのハ虫類風情が！！！」

ブチンッ！！！！そしてブシャアアア！！！！

あろうことか、虎眼は突如顔が般若へ豹変すると、ハイエドラゴンの久保を掴みそのまま力任せに素手で肉を引き千切った・・・と言うよりむしろ箸り取ったのだ。身体の一部が欠落した傷口からは大量の血液型機の様子に噴射し、目の眼絵にいた虎眼の全身を鮮血で赤く染め上げてしまった。もちろん引きちぎられたドラゴンは即死している。さらに虎眼はちぎり取ったハイエドラゴンの肉の塊をゆっくり顔へ近づけあろうことか・・・

喰った

ガブツ！！と噛みつき、ブチンツ！！と食い千切り、
グッチャグッチャ！！と咀嚼し、ゴクンツ！と飲み込み、
ペツ！と混じっていた骨を吐き捨て、ハイエドラゴンにその姿を見せつけたのだ。

ドラゴンのもぎたて生肉を本気で喰った虎眼は顔も口も、腕も服も、全身が生臭い赤で染まり上がっていた。その姿はまるで地獄の血の池から立ち上がった鬼か悪魔の様な毒々しいオーラが放たれている。

口に着いた血を拭い、一口食べただけの肉を放り捨てると虎眼はギロリと取り囲む他のハイエドラゴンを睨んだ。まず正面から睨み、続けて左右、そして後ろと、全ての咆哮に目を向けると、その睨みつけられた全てのハイエドラゴンは一匹残らず体が震え竦み上がってしまった。

「マズイ肉だ・・・この中で一番美味しい肉をしているのはどいつだあ？」

虎眼の赤い口から放たれたこの一言が最後のトドメになった。一匹のドラゴンが空へ向かい細い鳴き声を上げると、全てのドラゴンが全員回れ右をし、一斉に駆け足でその場から走り去り、砂漠の彼方へ姿を消してしまった。

ドラゴンの足音が聞こえなくなってくると、虎眼はジン達の方を向いた。もうさっきの様に睨むような眼をしているわけではないのだが4人は反射的にハイエドラゴンと同じ反応をとってしまう。

「ハイエドラゴンは群れを成す種だが、基本的に一匹一匹の自尊心が強いのが特徴だ。つまり仲間が一匹倒れても『俺は負けるはずがない精神』ってところだ、だから単体で倒しているとキリが無くなる。だからこうやって全体を同時に威嚇してやれば事は一瞬で終わる」

野生の世界の基本は弱肉強食。強い者こそが生き残り、弱い者がひれ伏すのが常識。

昔一人で旅をしていた時に虎眼が編み出したのがこの技だった。自分が圧倒的な捕食者の位置に立ち、弱い奴を絶対に寄せ付けないようにするためあの様な公開処刑の様な残忍かつ残酷な殺し方を行き、加えて野生動物なら誰もがする一睨み、「威嚇」を実行すればあっという間に弱いドラゴンは今後一切近づいてくるようなことが無くなる。

虎眼はそう語ると血でベトベトになってしまった上着を脱いで腰に結び付けた。本人の心境としてはさっさと風呂に入って洗濯をしたいと思っているのだろうが、他の四人は昼間猫眼が言っていたことを思い出している。

「地獄を見る」。なるほど、そういう事かと……。

この喧嘩で疲れ果てた一行は仕方なくその日の夜をこの砂漠で過ごすことになった。夕飯はさっき虎眼が狩ったハイエドラゴンに肉だ。肉食ドラゴンは生臭いというイメージを持っていたが、焼いて塩をまぶしてしまえば意外にまともに食えるものだとしり全員が驚かされた。虎眼によればこの辺りに生息しているほとんどのドラゴンは食う事が出来るらしい。それならば今後旅先での食糧確保も何とかかなりそうだとドクターの冗談を言い、全員がものすごく微妙な反応で笑った。

翌朝、日が完全に登り切った7時になってようやく一行は町に戻ってきた。

すると町の入り口には『町の平和のために戦った勇者追悼式～悲しみを明日の勇気に～』と掲げられたアーチと共に、町人全員が黒い装束と白い花を携えて追悼式を開いている真っ最中だった。もちろん無事生きて帰ってきた（ここ重要）一行を見て驚愕し、この追悼式の主催者が例のメシ屋の主人だと知った時、5人の怒りが限界突破した。

後にこの事件は新聞に掲載された。

『コンバット、謎の襲撃を受ける！！』

『コンバットの町半壊、原因不明』

『事件当日、町人誰も記憶にあらず！！薬物投与による記憶障害！？』

『町長語る！！覚えてないがドラゴンに襲われた方がマシだった気がする』

事件の犯人は語る。

Z「まああん時はさすがにキレたからな、やりすぎたとは思ってねえよ？」

H「当然の報いだ」

J「人を勝手に殺したあのクソ野郎が悪い」

A「でもいくらなんだってこれはヤバくねえさ？」

F「心配するな、メガネ君が採取したこのジェット石で町の連中はこの2、3日の記憶が消えている」

ZHJA「ナイス！！」

F「キ〜ッシッシッシッシッシッシッシッシッシ」